全体の質疑

指定討論を踏まえて

荒川：では戸田山先生の指摘に関して、話題提供の先生方から一言ありますでしょうか？

渡邊：今伺った話はすごく重要な問題点だと思ったんです。サトウタツヤの発表も含めて、今日の発表で問題になっていることは、むしろオントロジカルな問題、存在論的な問題なんですね。端的に言うと一つは時間の問題です。人間を時間的な存在として捉えるのか、時間を超えて捉えるかという問題ということです。それから個人の問題です。我々が素朴に感じている心理的な現象というのが、人は時間の経過から離れて生きられない、かつ個人的に感じられていることに関しては疑いようが無いことなんですが、そのことを学問としてどう扱うかということですね。端的に言ってランダムサンプリングするのかといった問題と繋がってくるので、これはまさに方法の問題ではないんですよ。だから今までの心理学のやり方で何となく自分が人間だと思っていることが捉えられていないときに、それが行動主義の問題だと言うのは、騙されている！皆さんは、皆さんの先生方からそう騙されたんです。みんな行動主義が悪いって(笑)本当はそうじゃないんだろうなと、すごく思います。

　というのは、共約不能な二つのヴィジョンがあるっていうのは、もちろんあると思うんですが、私はむしろ、中間的な、共約可能なものとして時間の流れと個人の存在を含めて扱える科学としての心理学があり得ると思っています。その時に共約の鍵となるのが、これは心理学の伝統ではあるんですが、「臨床」なんですよね。臨床的な現場があることで、その現場で起きている現実的な問題が共有されていれば、ある程度の共約可能性がそこに起きると思うし、そういう意味で心理学は臨床を忘れちゃいけない。その点では、質的な研究を考える人たちは臨床的な視点を常に持っているでしょ。その臨床的なものとの関係の中で、いわゆる科学的な心理学と何かが共有できることがあると思います。

　結局その、個人は平均してしまえばよくて、そしてランダムサンプリングによって個人を平均するだけではなくて、時間についても当然平均化しますから、その時に、時間をランダム化してしまってよいのかという議論を戦わせなくちゃいけない。それが共約不能な存在論

的な差異であれば、(心理学は) 2 つの学問に分かれていくのかもしれない。

スキナーが自分たちの学問を心理学ではなくてBehavior Analysisと呼んだことにはすごく深い意味があって、もう一つ重要なことはBehavior Analysis はPsychoanalysis と対になっているんですよ。もともと精神分析と行動主義は、意識が行動を支配していないという同じスタートラインを共有しているんです。20 世紀始めの人たちは（フロイトがそういう意識を持ったとは思えないけど、）意識を扱わないのは心理学ではないから心理学と呼ばなかったんじゃないかと思うんです。その後 100 年経った今ではそれらも含めて心理学と呼べるようになった可能性も、私はあるなと思っています。ただこの先どうなるかはわかりません。

私は戸田山先生の指摘されたモラリスト的なものにも興味を持っているんですが、心理学者の特徴っていうのは、心理学が好きなんですよ(笑)。自分たちが心理学者であることにすごく強いアイデンティティを持っていて、それに基づいて全く違うものを一つの学会に集めているんですね。日本心理学会の会員に河野哲也さんていう哲学者がいて、その人は毎回大会に来ていて、心理学者の宴会に必ず来るんです。そこで、「心理学って変だ」って言って大喜びして帰るんですよ。そこにあるのは、どう見ても共約不能なものたちが集まって一緒に大騒ぎしているものすごさなんです。他の学問から見たら、なんだかよくわからない共約可能性みたいなものを持っている心理学、その言葉の可能性みたいなものはプラスに考えていいのかなと思っています。以上、伺って思ったことを言いました。

荒川 : 戸田山先生にお伺いしたのですが、戸田山先生のおっしゃったことはわかったんですが、これが心理学の方法として認識されているかというと、そうでない気もちょっとしていて・・・。戸田山先生が描かれた図式っていうのは普及するシステムのメカニズムであって、どっちが正しいとかそういう話ではないわけですよね。

戸田山：うん。

渡邊：ただ内部的には正しさの基準はあるよね。

荒川：そうですね。

戸田山：(学問を) 3 つの要素でとらえるモデルを提案した意図は、今のメインストリームの心理学に対して違和感を持ったり、もうちょっと自由になったらいいんじゃないかと思っ

ているときに、どうやっていじることができるかっていうことなんですよ。新しいパラダイムだと提案してもなかなか受け入れられないときに、どこがしっかりしていないか（を見つける目安になる）。まあこういうやり方は非常にリダクショニズム的ではあるんですが（笑）。

サトウ先生の話の最後の方で出てきた、研究対象の全体を理解するという話は、心の研究だけじゃなくて、あっちこっちの分野にいますよね。つまりそれはリダクショニズムじゃないやり方での理解なわけで、ただ問題は、そういう研究では、どういうときに「わかった」ことになるのかが、まだ打ち出せないでいるわけじゃないですか。たとえば複雑系科学をやっている人たちの中には、分けていくのではなくて、全体を丸ごと理解したいんだっていう人が結構います。それを言葉で言うのは簡単だけど、何が達成されたときにそれがわかったことになるのかという基準が非常に難しくて、「こんなんでました」になってしまう（笑）。

だからやっぱりメインストリームっていうのはそれなりに偉くって、モデル上の３つの要素がしっかりしていて、それぞれが組み合わさってうまく動いているというのは、無視できないと私は思います。で、オルタナティブを考える人は、やっぱりそれぞれの要素を強くしていくことを考えないといけないし、それができないでいるときには、やっぱり何かが足りないんですよ。というようなことを考えるための枠組みとして、あのモデルを提案したわけです。

サトウ：私もまったくその通りだと思います。僕自身のことを振り返っても、たとえば知能検査というか知能指数というものが一つの取っ掛かりで、あんなもので知能というものが測れるということ自体が間違っているだろうと。そういうことをなぜ正解だと思うかということで、心理学史みたいなことをやっていたわけですよね。やり方が間違っているだから、やり方を色々と多様にすればいいだろうという話でも駄目なんだということですよね。結局存在論的なものをやんなきゃいけないっていうことで。

もう一つはシステムですよね。システム論的な存在として人間を考える。閉鎖システムで心を考えるっていうのは、フロイトもそうですよね。Psychoanalysis っていうのは化学のメタファーで、psycho っていうのがあってそれを analysis できるんだと。そうじゃなくって、人は関係論的システム論的存在であるから、システムの全体、人間を「私」として書くことは不可能で、皆さんと一緒に書くことしかできない、それがまた明日になると違う書き方をせざるを得ないっていうようなことをやっていかなきゃいけない。対象がおよそどんなかというのは、単純に言うと、閉鎖システムに対してオープンシステムな存在なんだと、そういう主張をしていかなきゃいけない。あと目的に関しても、ある程度の制約をかけた形で主張しなければ、何が正解かっていうことを示すことは出来ない、ということですよね。な

んかもう、「めんどくせー」ていう(笑)

渡邊：そんなことやるくらいだったらそれこそ質問紙とって論文書いた方が、っていうね。

サトウ：そんな感じになるよね。

渡邊：ただね、そこにあるのは言い換えると「納得」なんですよね。同じ所を共有するコミュニティっていうのはすごく大事で、3つのかたまりが力を持ってくるためにはコミュニティが必要で、だから質的なことをやりたい人たちがまず集まって学会を作ろうっていうのは、それなんですよね。ところが中でいじめあってちっとも論文が載らないっていうのが面白いんですけど(笑)

サトウ：いじめじゃなくて査読ですよ(笑)

渡邊：ただ人が増えてくれば、そこで納得する人たちも増えてくるので。だから一人が始めて、何万人も納得させてから広まっていくものでもないですよね。

サトウ：目的で集まっている人たちというと、今で言うとトランスパーソナル心理学みたいなことを言っている人たちは、人間は宇宙と繋がっているんだと思いたい人たちが集まって、あとは何をやってもオッケーっていう、そういう強いサイクルを作ってるっていう。目的から入っているようなところはあるよね。それは存在論がしっかりしているんだな。

荒川：松本さんは、何か。

松本：戸田山先生のコメントについては、私はそれに答えられるかなと思いながら聞いていました。もちろん、それに答えなければいけないと思っています。

2つほど思ったことがあって。1つは人間学という言葉を使うことについてです。先ほど紹介した浜田寿美男先生はピアジェ、ワロン、ハーロウ、ウェルナーの著作を訳して、それらの心理学者に関するクリティカルな議論もしていますが、心理学に違和感があるということで、人間学という形で語ることがあるんです。そのときに私は、人間学という言葉に対してなにか胡散臭さというか、思想的なものというか、そういうものを感じて、踏み込むことを躊躇してしまうというのが1つです。

2つ目は、コミュニティ内におけるポジションについてです。私は勤め先で理科系の方々と、相手のやっていることがよく分からないながらも一緒に仕事をすることがあります。心理学内にもいろいろな立場があって、さらにエスノグラフィーやフィールドワークをやっている人のなかにもいくつかの立場があります。近ければ近いなりに違いが分かって、仲良くやれないところはあるけれども、それでも場は収まっていますよね。収まってないですか？（笑）

そういったコミュニティに入っていく際、もしくは作る際に、私はどういうポジションをとって振舞えばよいのか、悩むところがあります。質的心理学のなかでもそうですし、発達心理学のなかでもそうです。それは私だけが感じることではないのではないかなと。この点に関して、何かご示唆があればと。

渡邊：それはつまり、心理学者であることって何なんだろうってことなんですよね。他の分野と接してみてわかるのは、心理学に何が期待されているかがわかるってことがすごく大事なんですけど、人間学みたいなアプローチをやっている学問っていうのは心理学以外にもあるわけなんですよ。それが（人間学の）一番の弱みです。一方で、方法論的行動主義ってすごいんですよ。戸田山先生もさっきすごいって言ってくれたけど。これは心理学しかやってないんですよ、そんなおかしなこと(笑)。心理学が編み出した、他にないすごいものです。むしろ他の学問が真似をしているんですよ。だからそれが無意味であるはずがないんだけど、その中でできないことがあるっていう認識を持ったときに、一つは個人としての心理学者がどう行動するかという問題にもなるかなと。質的研究をやっている人達ってみんな自分の問題として方法論を悩んでいるわけですよね。一方で実験心理学とかやっている人達は自分の問題として方法論について悩んだりしない、それが健全な学問のあり方なんじゃないですかね。いや悩んでいる人がいるっていうことを批判するんじゃなくて(笑)唐沢先生どうですか、今の問題について。

方法論的行動主義ではない研究をどう評価するか

唐沢かおり：悩んでいる・悩んでないってことで言うと、制約があることで解ける問題が限られているっていうのは、わりと、ある程度仕事している人達は皆考えていることなんじゃないかなと思うんですよね。制度の中で生きているから(笑)。その中でやっているんだけど、たとえば、まあ私を方法論的行動主義の立場の人間だとするとね、じゃあ質的な研究をしている方のアクティビティをどういう風に受け止めるかという問いがあるわけでしょ。そのときにやっぱり、「すみませんけどこの研究の目的がわかりません」とかね、たとえばサトウ

さんの分野では、どんな研究が良い研究でどんな研究が悪い研究かの判断基準がすごくわかりにくくて、査読が回ってきたときに困るんですよ(笑)。方法論的行動主義だとちゃんと納得する作法があるでしょ。ところが(質的研究では)ないのかあるのかもわからないから、そういうのも後で教えていただきたいなと。

だからそういうものの知見がね、というか考え方がやっぱりもっとうまくこっちに伝わってきてほしい。それは一つは言葉の使い方とか、一つ一つのところで色々ひっかかるものがあって、コミュニケーションの問題があるなと今日ちょっと思ったんですよ。いろいろ問題は立てているんだけど、ツッコミどころは満載じゃないですか(笑)それはあんまり良い状況じゃないので、少し改善する方が良いなと思いましたね。

それで、どんなのが良い研究なんですか。

サトウ:いま院生なんかに言ってることがあって、エスノグラフィーに関して言うと、その場に起きている行動を説明できる、ある種のカテゴリーを創造することによって説明がうまくできるっていうことが一つと、ついでに言えば、わからないことがわかるようになる、ここにはそういうものが存在しないんだみたいな、そういうことがわかるようになるのが良い研究。

唐沢:後者はわかるんですけど、何が到達できたら説明できたことになるのかがわからないんですよ。方法論的行動主義だと、こういう条件が整えば、このデータからこういう帰結を述べていいとか説明ができたとかってわかるでしょ。

サトウ:後者がわかるって言ってくれたけど、そこには前提があって、それはどのように記述したのかっていう作法はしっかりしているっていうことですね。前者がわからないって言うのは、僕もよくわかる。僕も学生とか院生の指導しているときに、そこは弱いところだと思いますね。つまらないことと面白いことは質的に違うので、わざわざ行かなくたって説明できるだろっていうようなことで分析が終わっていることが多くって、そこには駄目出しをしています。自分たちが作ったカテゴリー・説明図式によって、今までとは違う説明ができるっていう感覚が大事だと思います。そういう意味ではおっしゃることはよくわかって、論文だけ見ると何が新しいんだみたいな感じのことであっても、ずっとフィールドワークを一緒に見ているというか、分析を一緒にしていると、到達点になっているものとそうでないものは明らかになる。

唐沢：なんか職人技みたいだけど。じゃあそれは、質的な研究をしている方が持っている目的とどう関連するんですか。

サトウ：僕の言葉で言うと、さまざまなリダンダントな状況がある中で、どういう調和的な行動が、外からたとえ異常に見えたとしても、あるいはすごく複雑で大変そうに見えたとしても、なんか営まれているわけだから、その営みが、過不足なくではなくて、説明できて、不足するようなものもわかると。

渡邊：でもそこで「説明できる」って何なのか、っていうことですよね。私は質的心理学（会）ができたときに編集委員にさせられて随分読まされたんだけど、私も全然わかんなかったです。私は基本的に研究やらないから（笑）、どの研究も自分には関係ないんですけど、（質的研究は）特に関係ないわけですよね（笑）。それで気になったのは、研究である限りは一般化可能性がなくちゃいけないんじゃないかってことをいつも考えていて。いくつか読んだ中で私がこの研究はいいなって思ったものは、すべて共通して、そこで扱われたものが 1 ケースであっても、その知見から何かの類似性を持った他の現象が説明できる、他の人に起きていることが説明できて、かつそのことが述べられていると、理解できるんですよね。そうじゃなくて、ただケースの分厚い記述だけが何の説明もなくぽーんと放り出されたみたいなものが渡されると、困っちゃうわけですよね。

サトウ：僕はモデル主義なので、著者自身によるある種のモデルを作る、それによって読み手が一般化可能性であるとか、あるいは僕の言葉で言うと「転用可能性」が感じられるようなものが世に出る。

唐沢：それは我々がやろうとしていることと違いがあるのだろうか。対象に対してのある種の人間観とかも少しは違うのかもしれない。それがどう違うのかをわかりたい。

荒川：たぶん大きな違いは、予測と制御を前提としないっていうのが質的研究の前提としてある。

唐沢：予測と制御はできない（笑）

荒川：方法論的行動主義ではある種の母集団の属性みたいなものを調べるんですけれども、

質的研究ではそれもあんまり考えないんですよね。一つの解釈可能性でしかなくて、その属性みたいなものを前提としていない。

渡邊：そうであるならば何のためにやっているのかわかんない。人に言わなくてもいいんじゃないかと思ってしまう。

荒川：それは解釈の言葉を増やすためだと思います。

サトウ:新しいカテゴリーを作ることによって見えるものと見えないものがわかるっていうことが、僕は個人的には重視している。

渡邊:それはそこで論じられていない外側にある何かがそこから新しく理解できるってことでしょ？それは一般化可能性を志向していることになるのでは。そうだとするとそんなに変わらない。それこそ統計的検定っていうのはもともと、そこに出てきた一つの事実が他とは無関係な偶然の一つの事実ではないことを支えるわけですよね。検定して有意だったっていうのは、そこで得られたデータが偶然じゃなくて、他の場所でも同様の条件が整えば再現できるっていうことの証拠になっているよね、我々の世界では。そのようなものが質的研究にもあればわかりやすいんだけど。逆に言うと統計的検定を共有していることで、心理学はあらゆるテーマを同じ学問として扱える所があるんですよ。質的研究を別に悪く言うつもりがあって言っているんじゃないんだけれども、統計的検定があることで、こんなめちゃくちゃな学問が成立しているんですよ。

サトウ：誤りを低減するシステムを持っていないといけないっていうのはよくわかる。科学全般が持っているのは第一種の過誤を減らすっていう方向性ですよね。要するに無いものを有るって言っちゃいけないと。それが非常に強いお作法としてあって、たとえば血液型と性格の関係は、私なんかは勿論否定するけれども、あったらどうするんですかって良く聞かれるんだけれども、あったときにあるって言うのが学者の作法であって、今の段階では無いものを有るって言ったときの誤りの影響があまりに大きすぎると思うので、否定しているわけですね。だから第一種の過誤を減らすべきだっていうのはわかるし、そうするべきだと思う。私の言葉で言うと一般化可能性と「一般化の限定性」みたいな話です。普遍って言ったときに、時空を超えて人間全部にそうだって話になるのか、そしてなぜそれが許されるのか。

唐沢：それはどこまで一般化できるかについて、そこにモデルを書いていただければ構わないんだけど。ただ、目の前にいるこの人を私が理解して、それで良かったね、と言われると。

サトウ：それは「良かったね」としか言いようがないね(笑)そういうのはね、それこそ文芸論的な心理学として、違う方向に行くしかないんじゃないかな。

唐沢：私が社会心理学をやっているせいなのかもしれないんですけど、別に論文書くのも小説書くのも大して変わらなくて、世の中にただ一つの真実があってね、それを発見する（のが心理学の仕事だ）とは思ってなくて、表現の仕方として、たまたま心理学っていうのを持っているからそれで人はこうなんだって表現するわけでしょ。一個一個の研究は要因間の関連を測るっていうんでそれをちまちま扱っているんだけど、それがある一定の数集まってレビューされたときに、良いレビュアーが書くとそれはやっぱり非常に文芸的なって言うのかな、非常にヒューマニティみたいな理解の仕方がされて、日記とかだってみんな書くわけだから、純文学としての心理学みたいなのは あんまりラディカルでもないし、もう心理学の中に暗黙に入っている気がすごくするんですよ。だからそこを仮想敵みたいにしてね、そんなの無いからみたいに言うけど、あるじゃんと、ちゃんと（論文を）読みなさいと、やっぱり思っちゃうんですよ。だから仮想敵の置き方っていうのをもうちょっと考えなきゃいけないんじゃないかと。

渡邊：仮想敵のない議論をしたらいいんですよ。

サトウ：俺は別に行動主義は敵じゃないよ(笑)。知能みたいな構成概念を否定するときに、我々が飛びついたのが行動主義だったっていう歴史的な経緯があるわけで、行動主義にはほんとに親和的。むしろ質的心理学をやっている人達は、僕らが行動主義に親和的だってことを聞く方が驚くよね。

渡邊：だって今日は、我々は行動主義的な人だってことで呼ばれたんでしょ(笑)

サトウ：今回この一ヶ月くらいで、行動主義的なものと記号的なものとエスノグラフィってものをどういう風に考えたらいいのかってことで、光を監獄に閉じ込めるみたいなね、そういうことで結びついたってことです。

荒川：ちょっとじゃあ、他のフロアの方からも意見を聞いてみたいと思います。

知識とその共有の仕方の問題

清水：大阪大学の清水裕士です。すごく興味深い話で色々と考えさせられました。一つ思ったのは、心理学の、というか心というものが持つ重要な問題があるんじゃないかと思ったんです。というのは、心というのはある種主観的なものだっていう側面がある一方、客観があるから主観があるというようなある種の二項対立が主観と客観の間にはあって、それが心というものの基本概念を支えているような気がするんです。そうなってくると、心を考える学問だからこそ二つの概念が出てくるのではないかと。我々が心理学をやるときに、主観と客観という二項対立がどういう意味を持つのかを考えなければならない重要な問題なのではないかと思ったんです。

あと、科学、研究、客観、学問という色々なタームが出てきましたが、それらがどういう関係にあるのか、等号なのか不等号なのかを考えなければいけないだろうと。先ほどのお話の中に、科学というのは「わかった」感のルールがあるんだということが出てきたと思いますが、そこにヒントがあった気がしました。たとえば私は社会心理学の出身なので行動主義的な方法論の立場に立っていますが、有意でないのに差があったなんて言うと当然アウトなわけで(笑)。まあそんなこと言うのは学部生でもいないわけなんですけれども。それが主観的なものに関しては、そういった納得のルールが成立するというのがそもそも可能なのかを問う必要がある気がしました。主観というのはその人にしかわからないもので、じゃあその人しかわからないのに皆にわかるルールをどうやって作るんだという、典型的な矛盾があるんじゃないかなと。

サトウ：要はね、科学っていうのは知るっていうことだから、まったく言っている通りだと思うんだよね。やり方の問題ではなくて、知ることである。その知り方がどう違うのかっていうようなことを意識化しなければならない。今の話でわかったんだけれども、質的研究と言われるもののなかで、結局自分がどう理解しましたっていう形で落とし込むような研究はやっぱりわかりにくいんだろうと。

モデルを立てないで了解するっていう、鯨岡一派の話なんかは、僕はどっちかっていうと良くないと思っているんだけれども、なぜかっていうと、ある人と関わっている、良い理解者がいるってことなんだよね。僕はそういうのはどっちかっていうと気持ち悪いと思うんですよ。ある人の人生が良いものだ、関係として書けるんだっていうときに、実は暗黙の前提で、鯨岡さんとかがいて、その人が理解した対象者の世界というもの、そして理解する人も

大変なんだよというメッセージを含んでいる。なので、現場の保育士さんたちには非常に受けが良い、非常に読者が多いんだよね。それよりは僕はモデルを立てて、対象の理解の形式なんだと。それは著者本人の理解に過ぎないとは言えども、より公共的な形で提示しておいた方がいいんじゃないかなっていう、そういう感じですね。要するに物語を自分の側に回収するのは良くない。

渡邊：研究で何かっていうのも同じことなんですよね。研究っていうのは共有された何かで分かり合えることが大事だと。

サトウ：共有するような仕方になってなきゃいけないのに、結局自分はどういう風に解釈しましたとか、こういう仕事をしている私は大変なんです、大変なので良い対象者に巡り会えて良かったっていうような、そういう書き方が実際にあるわけです。それは対象の理解というよりも、理解する人と理解になっていて、理解する人にとっては実践のためには良いんだけれども、どうなのっていう。そこで、僕なんかは線引きをしている部分があります。

唐沢：言っていることはわかるような気もするんだけれども、出てきたデータを意味づけるプロセスっていうのがあって、その意味づけで自分の側に引っ張って、私はこんなに苦労しているっていうのはまずいってことなんですよね。じゃあどんな風な意味づけが良いんですか。全部ばーんと投げ出されるとそれは難しいから、理解できない。やっぱりあるストーリーとか、スキームをもって、解釈は書かれると思うんですよね。その解釈が書かれる作法が明確じゃないんだろうと思う。そこで、書き手の言葉がすごく上手いと、騙されちゃうじゃないですか。よいジャーナリストが書いたものと同じように評価されてしまう。それでいいっていうならいいと思うんですけどね。じゃあジャーナリストを養成する感じでトレーニングしていけばいい。もしくは小説家みたいな。

サトウ：ジャーナリズムっていうと報道倫理があるので、羨ましいなあと思う所があったり(笑)それこそ目的がはっきりしているし、研究倫理ではできないようなことができたりするので複雑な気持ちになるんですが。それは別として、解釈の妥当性をある程度先に決めておくっていうことになるとグラウンデッド・セオリー・アプローチみたいになって、一定の手続きを経なければできないということになっちゃうんですよね。そうではなくてある程度の自由度を持たせたいという気持ちはある。

唐沢：その境界はファジーだと思うんだけど。

渡邊：質的心理学のコミュニティっていうのは、研究者がわかったっていう気持ちで結び付けられているのではないかな。相互ではなくて。自分は質的な方法っていうのを手に入れたことで以前わからなかったことがわかるようになりましたと思っている人達が、その体験を語り合って慰めあうっていうか、盛り上がるコミュニティというね(笑)

サトウ：たとえば看護の仕事なんかは量的にも質的にも増えたので、人と接するような領域の研究が増えたんだと思う。そこで医療の補助の研究ばっかりしているわけにはいかないっていうことになって、それで患者さんの生活に目が向けられるようになる。そうすると、質問紙撒いたり資料整理ばっかりっていうわけにはいかないと。

それでさっき言い忘れたことがあって、ALS という病気があって、それは運動神経だけが選択的に使えなくなってくる、で感覚神経は残るという、そういう病気です。なので最終的には左手の薬指だけしか動かなくなる、これを想像してみて。でも左手の薬指だけさえ動けばパソコンが使えるんです。スイッチを二回押したら上に行く、三回押したら左に行くとか。場合によってはメールも打てる。

これは実話なんだけれども、そういうことをうちの修論生が発表したら、ある心理学の先生が、機能が出来ない人に機能をエンハンスメントする機械ができたら通信できて当たり前じゃないですか、何なんですかその研究はという風に言われたわけですね。そんなことより、刺激を何か用意して、何か実験やらしてもらったらどうですかっていうようなことをおっしゃるわけ。やっぱりそういう状況じゃあないわけですよ。話を戻すと、要するに看護の人とか福祉の人達っていうのは、そういう中で研究せざるを得ないってことがあって、そういうときには質的な研究方法が必要なんだろうなという。

渡邊：なんだかそれじゃあテーマの前に研究しなきゃいけないっていうことじゃないの。

サトウ：いやいやそうじゃない、研究の目的はそれぞれの分野によってあるわけだから。

渡邊：でもね、今の看護の話でいうならば、看護っていう一定のコミュニティに属する人達がみんなそうだよねって思っていることを研究として伝達するための方法がないみたいな悩みっていうのはきっとあるんだと思うんですよね。少し安易な使い方をするけどいわゆる臨床の知みたいなものがそこにあって、その中には嘘のものと本当のものとがあるんだけど、

それを確かめるような方法がないようなときにはどうしたらいいですかって言われるわけですよね。そうすると心理学者は質的な方法っていうのもありますっていうアドバイスをするわけですよ、医療の人達とかにね。それを研究にしていくための手続きっていうのはどうだったらいいかっていうと、やっぱりわからないと思う。看護の人達も悩んでいるわけでしょ。で医者に馬鹿にされるっていう。

心理学における主観・客観

荒川：えーと、もともとは清水さんの質問だったんですが、どうでしょうか。主観－客観問題っていうのはまた別の問題で、質的研究者は本人の主観に特別の意味をそんなに置いているわけではなかったりするんですよね。

清水：本人の主観っていうか、心の主観性の問題というか。その、心を扱うって言うときに、主観と客観で簡単に二つって言ってますけど、たぶん二つではないんだと思うんです。それは心を扱う上での必然性ではないかと思ったんです。それをコメントしたかったということです。別に僕は質的研究を批判しているってわけではないんですけれども、心の主観と客観の二つが出てきましたと、だからその二つを扱いましょうでいいのだろうかということです。それを考えたいのが僕の今の関心なんです。

唐沢：今使っている客観という言葉は、要するに我々の心をデータによって客観化するっていうことで、主観ていうのは心というのは主観から成り立っているとして、その主観を研究対象として扱っていないという意味で使っているんですか。

清水：そうですね、質的研究あるいは客観的な心理学を批判する一つの方法として、たとえば人の主観が扱われていないっていう先ほどのコメントとか、あるいは意味の問題、コミュニケーションや非言語行動を扱うときに、その頻度が意味なのかどうなのかっていうのは常にクエスチョンがつくわけで、それはうちの研究室でずっと議論されていることではあるんですけれども。じゃあその意味がどこにいったのかなっていう話をしたときに、客観的な心理学や行動主義的な心理学を突き詰めると、意味が取り残されたような気がするんです。じゃあなんで取り残されたと思うのかというと、それが心という問題の必然性じゃないかという気がしているんですね。

渡邊：その違和感に心理学者は耐え続けるべきなのか、その違和感への答えも含めて心理学

としてやるべきなのか、なんだよね。

サトウ：コミュニケーションをノンバーバルな方に偏ってやるべきかどうかなんだよね。

清水：それはそうです。

サトウ：あとね、初対面の人同士の方がやりやすいからやっているっていうことに、耐え続けるかどうかだと思うんだよね。

荒川:今の話は操作主義における外面的な行動とそれが意味するものとの結びつきの関係の話であって、主観と客観の問題とはまた別ではないかなと。

清水：僕はそれが何か結びついている気がするということで。

戸田山：まだ言っていることがちょっとよくわからないんだけれども、心の持ち主にとって心がどう体験されるかっていうこと？

清水：まあ、そういうことなのかもしれないです。

唐沢：認知心理学が典型的にやっているのは意味づけの問題というかね。主観を主観のまま扱わずに、うまく操作的に取り出して主観を研究してきたと思うんですよ。で、主観を科学的に研究する学問だっていう所に認知心理学とか社会的認知は位置づけられているので、もしそれでご不満が解決するならそれでいいし、それを超えて尚且つ何か不満があるんだったら、それは今の心理学が解決できていない問題なので、それがあると更に悩む問題なのかなと。

渡邊：でも主観そのものを主観のまま研究するなんて、心理学でなくたって、どのみち誰もできないでしょ。

清水：それは確かにそうです。ただ僕は主観を主観のまま研究できないことに不満を持っているわけじゃないんです。

渡邊：たとえば語られた主観であれば全然構わないんですよね。

戸田山：主観を主観のままで、主観の中から追求しましょうって思った人達が現象学っていうのを始めたんだと思うんですよ。それをきちんと方法論にしようと。でもそれは、心理学じゃないよね。

フォームという次元

松本：さっき鯨岡先生の話が出ました。確かに、関係発達論では観察者と被観察者が関わって、その関わりを記述していきます。鯨岡先生のエピソード記述では、その記述がいい事例というか、その記述の背景にいい観察者・いい介入者がいる、そうなりがちであることは否定しません。

ただ鯨岡先生が手がけたウェルナーの翻訳において、人は時間的存在として時間のなかを生きているからただ体験の記述をすればいいというわけではなく、形式を扱うと記しています。体験の内実は個々違うけれども、でも形式は扱えるのではないか考えていたようです。

サトウ：形式っていうか、フォームだよね。

松本:そうです、フォームです。私がやろうとしていることはそこかなと位置づけています。私は自分の研究を現象学とは思っていないです。

戸田山先生がいうモデルとしてしまうと、対象化することになって、モデルを作ることが目的化するように思います。モデルや構成概念を作ればいいのかという疑問が私にはあります。論文のなかで、因子分析をしてこういうモデルや構成概念が出ました、どうです？という風にボンボンボンボン出していって、どんどんどんどん流されていくわけですよ。モデルや構成概念を作ることが目的化することは問題だろうと思っています。

一方で、記述することが良いでしょうと暗に同意を求めるメッセージをはらんでいることについては、うーん、それも確かによろしくないと思う所もあります。

私の立場は、さっき話したように個々内実は違うけれども、形式をそこの只中から提示する、そういうポジションがとれないかなと思うところです。

戸田山：でもなんかそれは、すごく現象学なんですけれども。

松本：あーそうですか。

サトウ：ヤーン・ヴァルシナーはウェルナーの影響を受けているからね、形式・形っていうのは質なんだと、そういうことはよく言っている。

カントの心理学批判の意味

サトウ:で、話はちょっと変わるけどね、カントが心理学は科学にならないって言った話は、僕も面白がってよくやってたんですけども、なんでそんなことを言わなければいけないのか、っていう問題ってあるんだよね。カントはある本の中で、心理学は科学にならないってよく言っているわけですよ。

戸田山：言ってますね。

サトウ：それは『自然哲学の形而上学的原理』の中で、心理学は科学にならないと言っているわけです。なんで言わなければいけないのかっていったときに、時代の流れとしてあらゆる学問が科学との接点を持ちたいっていうのがあったと考えるべきなのか、どうなんだろう。サイコロジーっていうもの自体はどっちかっていうと魂の学というか、悪魔学とか天使学みたいなね、そういうものとしてずうっときていて、そこをなぜ科学化するかっていうと、やっぱり当時の科学の影響ってものが強かったのか。あともう一点はカントの後任者のヘルバルトっていう人がなんか表象力学みたいな、計算式だけでやるようなものを立ち上げて、それはぽしゃったみたいな話があるわけじゃないですか。それも含めてね、その当時の哲学状況から見た心理学はどうなんでしょう。科学っていうものを、まず精神物理学っていう形で取り入れて、それをまたワトソンていう人が出てきて、行動主義っていう形で具現化していったっていうのが流れですよね。だとしたらカントの時代のね、心理学と科学に対するスタンスっていうのは何なんでしょう。

戸田山：カントのあの本の中でしきりに批判されているのは内観に基づく心理学ですよね。それがカントの時代には盛んになってきていて、それに対してサイコフィジックスも出てきていて、そっちを擁護したかったんですよね。そっちの方が科学っぽいと。やっぱりその時どんな心理学があったのかっていうのを考えないと。カントが心理学全部が駄目みたいに言っているかっていうと、必ずしもそんなことは言ってないというのが、一応の定説ですよね。

質的研究への行動主義の影響

文野：東京都立大学の文野と言いますけれども、この研究会の趣旨を見たときに、ナラティブ研究みたいなのも行動主義の影響を受けているとあって、その辺はどういう風に捉えられているのかというのをお聞きしたいなと。渡邊さんの発表では方法論として影響を受けているというのがあったんですけれども、他の方にも何かお考えがあれば、それをお伺いしたいです。

渡邊：私はちょっと不用意な言い方をしたかなと思っているんだけど、行動主義の影響を受けているというよりは、行動主義と同じような機能だっていうことで、直接行動主義の影響を受けてああなったんではないと思うよ。心理学の中での機能のあり方が似ているっていう。

荒川：その背景として科学性・客観性みたいなものが心理学に求められるというコンテクストがあったというところで、ああいう形での科学性の担保の仕方をしたという点で、行動主義とは別の形ですけれども狙っていることは同じですよね。そのヴィジョンを決めた大きな要因というのが、行動主義っていうものがあったからだと。

渡邊：お二人の問題意識の中では、ここら辺が行動主義に犯されているとか、そういうのはあるんですか？

荒川：私と松本さんとでは違うかもしれないけど、私のほうとしては先ほどの操作主義のことですね。そうしたもの、客観主義みたいな理念が質的心理学の中にも入ってきていると。それは直接的に行動主義の影響ではないにしても、行動主義がある種の座標軸を作った感じ。

渡邊：そうすると、荒川さんが考えている質的心理学というのはまず客観主義であってはいけないし、操作主義的であってはいけないと。

荒川：いや、いけないというわけではないんですけれど、それをもう少し意識して、対象化して客観化しないといけないと。

渡邊：それは質的研究ではないものでは一定の理由に基づいて選ばれているんだっていうことを意識して、それと同じ理由で選ぶかどうか、って言って選ぶべきだっていう意味ですよね？

荒川：選んでも、選ばなくてもいいだろうと。僕はどっちかっていうと極端な人文学的心理学ですけどね。

松本：僕は、ナラティブ研究っていうのはデータ主義だと考えています。データを意味とか解釈とか、かっこよく言えばそうですけど、それをエビデンスとして、規則性を提示する。

先ほど環境はすでに私たちを取り囲んでいるという話をしました。ナラティブ研究のほとんどは、語られたことを対象化して、自分と切り離した上で分析をするというアプローチをとるように思います。

先ほど戸田山先生に現象学だって言われましたけど(笑)、そう言われると困るんですが、時間と環境は私たちを取り囲んで切り離せないというのが私の問題意識であり、それを示すことに力を注いでいることは間違いないです。

人文学的心理学の可能性

戸田山：荒川さんの考えている人文学的心理学っていうのはどういうものなんでしょうか？

荒川：考え方としては、方法ではなくて、結果の影響の方だけで結論の意味を評価するということ。ある種の知見の評価をするときに、いわゆる心理学の方法論的行動主義っていうのは、どうやってその知識を得たかで評価するわけですよね。そうじゃなくて、その言説が、サトウ先生の言葉でいうとある種の記号として普及したときの影響だけで評価をする、そういうあり方もあるんじゃないかなということです。

渡邊：そうするとその妥当性の基準というのは外側に任せることになるよね。学問内部に妥当性の基準を持たないものになりたいと。

荒川：なりたい（笑）

唐沢：要するに読者がいいよねって言ったらいいと？

荒川：いいよねって言って、しかもそれが社会的な影響として問題なければいい。

唐沢：社会的な影響というのは？

荒川 : つまりみんなが良いといってもそれで、みんなが覚醒剤を打つようになってしまう状況はまずいと。

サトウ：それは学問としての制約だよね。

戸田山：だからみんなを幸せにすればいいんですよ。すごく単純化した視点としては。

荒川 : いろんな意味で。誰かを抑圧するのではない形で。

渡邊 : きっと、それがなぜ心理学でなければならないのかって、きっと問われてしまうでしょ。心理学の中でなぜやるのかと。

荒川 : 心理学という名でやらなくてもいいかもしれませんけれども、やっぱり心についての言説を扱っているので、それは心理学でやるべきじゃないかと。

サトウ：それは目的の話？

荒川 : そうです。

渡邊 : 目的が共有されている他の心理学は、目的が共有されているって意味では仲間なの？

荒川 : そうです。同じく心について知る、心についての言説を出すって意味では。

戸田山：「心について知る」なんてのはぬるい言い方だよ（笑）

唐沢 : でもネガティブな社会的影響って言うときに、荒川さんが心について何かを語ったとするよね。でみんながそれを「そうだそうだ、すごいよね」って言って、それが大嘘だったとしてさ、心についての間違った理解を日本人が広く共有したとするよね。それはそれで、どうなりますか？

荒川 : 問題ないと思います。それで害がなければ。

唐沢：でも間違った知識を広く普及させたことは、害でしょ？

荒川：それは「間違った」っていうときの基準の話で。

唐沢：でも知見として正しらしさっていうのはやっぱりあると思うし、それを保障するために方法論が作られたと思うんですよね。だから私達があることを論文に書くときも、思ったことを全部は書けないでしょ、やっぱりね。一応はこれを言ってもまあ最低限の責任は持ちますっていう、そういう制約があるんだけど。なんでも言っていいんだったらさ、もっと何でも言いたい（笑）

戸田山：目的って価値と言い換えてもいいんですよ。真理っていうのに価値を置かない知的な営みがあったっていいわけでしょ。だからたとえば上手な嘘をつく、みんなが知らないような嘘だったら、真理よりも超越するんだっていう考え方だってあって。で、そこまでおっしゃるなら、すごいと思って、いま感動しているんです。

荒川：前にそれを言ったら、伊勢田先生には「危険な方向に進んでいる」って言われましたけど（笑）

渡邊：それは学というより何かの運動じゃん。

荒川：何が「学」でしかも心理学なのかっていうことなんですが、やっぱり心理学は必要だと思っています。なぜかと言うと、「単にこう思いました」っていうだけなら何でもできるかっていうと意外にできない。人間ができる想像力の限界っていうのはたかが知れている。で、その限界を超えるためのものがたとえば実験だと僕は思ってますし、自分の仮説が実験で棄却されることの意味だと思う。そのように、想像力を越える方法って言うのは他のものであってもいいだろうと思っています。たとえばKJ法でもいい。ただそこで得られた知見が the セオリーであってはいけないだけです。いろいろな方法で、別の側面から見える、それがしかも社会的な何らかの有益性を伴うならば、それはそれでいいんじゃないかと思います。

渡邊：果たしてそれが人文学的なのかな。だって人文学って言ったってたとえば歴史なんか全然そんなこと言えないぜ。

荒川：かもしれません。

渡邊：個人史なんか歴史じゃないって言われたよ、この間歴史学者に（笑）

荒川：別に人文学ってことにこだわっているわけじゃなくて、さっきの 3 つの中でいうと一番下になるんだという程度で。

サトウ：今の話はとても面白い。前は時代がついてきてなかった。ついに面白いと言える所まで来た。

心理学における時間の問題

吉田：教育発達科学研究科の吉田と申します。わからなかった点がありまして、方法論的行動主義とそれ以外の立場で、何が違うかについてキーワードがいくつか出てきたと思うんですけど、時間というキーワードが出てきていて、それがよくわからなかったので質問させていただきたいんですが。

　時間をどう捉えるかが違うと言うときの中身がよくわからなくて、たとえば質的な立場では個人の時間軸というのを重視して、記号だとか意味だとかが立ち現れてくるには、その人にとっての必然性があって、その流れを重視するという意味で時間という言葉が使われているんでしょうか。

渡邊：私はその通りだと思いますよ。個人と不可分な時間ということで。だって時間っていうのは個人ごとにしか体験されないんだから。

吉田：そうすると必然か偶然かという分け方をすると、その人にとっての意味が立ち現れてくる必然性がそこにはある、その人がそう物語るにはそういう必然性があるんだというようなことでしょうか。

渡邊：それはそうであってもいいし。

サトウ：それを今、コンティンジェンシーという言葉で表しているわけですよ。必然なのか偶然なのかっていうのは、わからないわけですよ。たとえばここでね、たまたま会ったから

結婚したっていうような話ってあるよね。だけどそれは、結婚したから今日会ったことがたまたまなんであって、みんなたまたまなわけ。名古屋駅前で中学の同級生にたまたま会ったとして、それは昔関係があったからたまたまなんであって。要は偶然か必然かっていうのは分けられなくって、それをコンティンジェンシー、偶有性と呼ぼうと。

で、なぜコンティンジェンシーを随伴性と訳したのかは色々と責められていて、「偶」っていう字を入れようっていう説もあったんですよね。でも日本語では随伴性っていうそういう訳にしちゃった。その偶有性はさっきの行動主義で言っている ABC デザインで使われているのと同じ用語なの。あるいは社会学で言うところのコンティンジェンシーテーブルっていうのがあって、年収が高い人がどういう政治的態度を持つかといった、いわゆる 2×2 のセル表のことを言うんだけれども。

で、コンティンジェンシーっていうのをどのように考えるかっていうのは、個人の歴史を抜きにしては語れない、それを偶然と呼ぶか必然と呼ぶかはいろんな議論があり得るんだけれども。行動主義ではそれを必然に落とし続けることによって、一般法則を見ていこうと。コンティンジェンシー自体を支配する人がいるから、方法論的行動主義っていうのが成り立つ。で、そうじゃない場合にどうするのっていうのが、問いにはなり得るだろうと。

吉田：そのコンティンジェンシーには、社会とか文化に規定されたという意味以外での意味を含んでいるんでしょうか。

サトウ：もちろん社会や文化にもある程度の規定はされますよね。でも同じ規定のされ方をしているわけではない。それは座り方ひとつとってもわかりますよね。

吉田:そうなると(行動主義と質的な立場とに)違いがあるのかなという疑問が生じてきて。

渡邊：テーマによるんじゃないかなという気がするんですけどね。それこそ知覚や感覚の問題はさ、それについては違いがないような感じがするから、別に時間の問題を気にしなくても研究できるけれども。結局質的方法が求められるのは、質的研究をやりたい人達がやりたいテーマのせいだよね。

サトウ：それがテーマのせいなのか、存在論的に違うのかをはっきりしないとっていうのが今日のお話だったわけだよね。テーマだけならもうちょっとうまくやれみたいにさ（笑）

戸田山：アルゴリズムのステップっていうのと時間っていうのは違う。メインストリームの心理学でも、時間めいたもの、つまり前後関係は考慮している。できあがったシステムの働きを分析するときはそうなるけど､そのシステムがどう生成してくるのかっていうのを考えるときには、ステップじゃない意味での時間っていうのがすごく大事になってくる。

同じ問題が発生学にあって、発生学って、タイミングの勝負なわけですよ。ちょっと違う話になってくるけど、亀さんっているじゃないですか。亀の甲羅ってあれ肋骨ですよね。亀ってこう手足を甲羅の中に引っ込めることができるってことはさ､肋骨が作られた肩甲骨の中に甲羅が入っているわけですよ。私たちは肋骨の外に肩甲骨があるでしょ。で亀以外の動物は全部そう。亀っていうのはおそらくトカゲみたいなものが進化してできたわけで。そうすると、外にあった肩甲骨が、いつの間にか中に入ったんですけど、じゃあ、どうしてそうなったのって考えると、進化の途中で肋骨が肩甲骨に挟まっていたのかとか、でもそんな生き物は生きていけないんで、要するに何が問題かっていうと、肋骨がだんだんだんだん発生の途中でできてくるときに、肩甲骨の元になるやつができるんだけど、それがちょっとしたタイミングが変わると中に入ってっちゃったり、外に出ちゃったりすると。

だから必要なものが必要なときに出会うことができるかっていうことが発生ではすごく大事で、それと個人のヒストリーっていうのは、何がいつどういうタイミングでその人を取り巻く環境の中に出てきたかっていうことに非常に大きく左右されるって見方があり得るんだよね。だからそういうことをおっしゃってるんだと思うんですよね。

荒川：ではこの辺で、そろそろ時間が過ぎていますので、何か言い残したことがある人は。

サトウ：これ今日持ってきたんで皆さんにお見せしましたが、ワトソンが『唯物心理学』って名前で、昭和 5 年に訳されているんですね。

荒川：じゃあ今回発表くださった先生方に拍手で終了したいと思います。どうもありがとうございました。